

マタイの福音書の5章、イエス・キリストの説教の中でも長いものです。『山上の垂訓』、『山上の説教』と呼ばれるものを今から見て参りたいと思います。マタイの5章から7章は、その『山上の垂訓』にあたる部分です。この中には、日本人にも馴染みのあるいろいろなことわざもあります。言い回しが聞いたことあるな、と思うものも多々出てくると思います。例えば『豚に真珠』。勿論これは、この山上の説教から採られていることは、皆さんはもうお分かりだと思いますが、意外と知られていないかもしれません。または、『砂上の楼閣』という言葉。砂の上に建てた家です。また、このシーズンによく使われる『狭き門』という言葉があります。勿論全然間違った使い方がされているんですけども。他にも『地の塩』なんて言葉もあります。これらもすべて国語辞典を見て頂くと、もう既に日本語になった言葉として定着しています。勿論聖書から外れて独り歩きしてしまっている言葉もありますけれども。そういった言葉も正しく、この『山上の説教』から学んでいければと思います。また他にも浄土真宗の開祖である親鸞という人が、西本願寺に今も貯蔵されているという『世尊布施論』というものを、中国のネストリウス派のキリスト教、景教の聖典として日本に持ち帰って、それが今、西本願寺の中に所蔵されている、保管されているということで、これも少し前に話題となりました。鎌倉時代までに既に新約聖書の一部が、景教という形で中国に渡って、それを親鸞が持ち帰って来たと。その内容というのは、実際に景教の漢訳經典となっている『世尊布施論』というもので、『世尊』というのはお釈迦さんのことでなくて、キリストさんのことであります。イエス・キリストのことを『世尊』と景教では呼んでいるわけです。で、その内容は、アダムの創造とか、墮落、またイエス・キリストの降誕、生涯、教え、救いなどに及ぶというものであります。特にイエス・キリストの説教の『山上の垂訓』が、マタイの5章から7章の内容がそっくりそのままこの『世尊布世論』の中に転用されています。例えば「空の鳥を見よ。」とか、「種蒔きもせず、刈入れもしない。」、「あなたがたは食べ物や住まいのことで心を煩わせてはいけない。」とか、「求めよ。そうすれば与えられる。」、「叩け、そうすれば開かれる。」、「誰にでも求める者には与えられ、誰でも叩く者には開かれる。」とか、「右手のすることは、左の手に知らせるな。」といった教えが、すべてそっくりコピーされています。ですから、『浄土真宗』というのには、キリスト教のパクリと言っても差し支えないかもしれません。事実、親鸞の広めた「南無阿弥陀仏」。これは「阿弥陀仏を信じます。帰依します。」というのがその意味ですが、「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」とよく分からずに唱える人もあるわけですが、その「阿弥陀仏」の名前に心を念じて唱えるならば救われる、信じる者は救われる、勿論これは原始仏教には無い教えです。でも、それはキリスト教にはある教えです。『主の御名を呼び求める者は誰でも救われる。』これはヨエル書にも、旧約聖書にも、書かれていることすし、使徒の働き2章にも、ローマ書10章にも書かれている内容です。キリスト教の救いの特徴、それは信仰義認です。イエス・キリストを信じる者は誰でも救われる。この教えは釈迦が説いたわけではありません。それは正に新約聖書の教えです。知らないうちに、『世尊布施論』を通して日本人にもイエス・キリストの『山上の垂訓』が、マタイの福音書5章から7章は既に伝わっていたというのは、興味深いところでもあります。

そして今晚のテキストは、そのマタイの5章1～12節までにしたいと思っています。何とかこの時間に、この重要な箇所をサラッとカバーしたいと願っております。それは、『幸いである』という幸福の説教という内容で8つの幸い、若しくは9つの幸いというふうにも言って、『八福の教え』、若しくは幸福に至る教えですから『至福の教え』というふうにも呼ばれる大切な箇所でもあります。そして、その箇所は歴代の名説教者たちが、沢山膨大な説教を残しております。今も私たちにそのいくつかは残っているわけですね

ども、その中でも決定版というのが、『山上の説教』の説教の決定版、講解説教というスタイルで、D・M・ロイドジョーンズという人が残したものがあります。それは今私の手元にあります。教会にも置いてありますので、是非これを機会にお読みになって頂きたいと思います。ロイドジョーンズ、これは20世紀を代表する講解説教の名手ですが、その彼のライフワークとなったのが、この『山上の説教』です。序文のところにいろいろと、また序論のところにもロイドジョーンズのこの『山上の説教』に対するいろいろな思い、それがきれいにまとまっているので、いくつか抜粋して、私たちはどういう思いでこの『山上の説教』に取り組むべきなのか。この『山上の説教』を通して私たちは何を発見すべきか、得るべきなのか、というところも少し皆さんにお分かちしたいと思います。

『山上の説教』は、自分にどういう意味を持っているか。自分の生活のどの部分に入ってくるか。自分の考え方や見方のどこに位置を占めているか。マタイの福音書5章から7章までの重要な位置にあるこの説教は、自分とどんな関係があるか。これらの質問に答えてみると、その結果は実に興味深く、驚くべきものであることに気づくであろう。私たちは、確かに恵みと赦しの教理を良く知っており、キリストに頼っている。しかしながら、私たちが「権威がある」と主張しているこの聖書の中に、山上の説教も置かれているのである。それでは、この説教は私たちの体系のどこに位置を占めているのであろうか。

そして、山上の説教は、主イエスが、ご自身の新しい戒め（これはヨハネの福音書13:34のことです。『わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。』というその言葉が、イエスによって新しい戒めだと言われています。）と呼んだものの、偉大で雄大な、また完全な大成であるということである。主イエスの新しい戒めとは、ご自身が私たちを愛して下さったのと同じように、私たちも互いに愛し合うことである。山上の説教は、この戒めの雄大な展開に他ならない。私たちがキリストのものであり、主イエスが「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」という言葉を私たちに語ったのであれば、それを行う方法をここに示して下さるのである。

また山上の説教は、「このようにしなさい。そうすればキリスト者になれる。」と言っているのではない。むしろ「あなたはキリスト者なのであるから、このように生きなさい。」と言っているのである。これはキリスト者の生きるべき道であり、キリスト者が生きるように定められた道である。

また、この『山上の説教』を学ぶ目的もロイドジョーンズは、序論のところにいくつも述べています。何故この『山上の説教』を学ばなければならないのか。そういったことを今すべて読み上げることは出来ませんが、是非これを機会にロイドジョーンズの『山上の説教』という本、少し分厚いですが決定版と言っていいと思います。そして最後にもう一つだけロイドジョーンズから引用したいと思います。

『山上の説教』は私たちとは無関係だと言ってはならない。それどころか私たちと切っても切れない関係がある。もし私たち全員が『山上の説教』の生活をしていれば、人々はキリストの福音には生きた力があることを知るであろう。彼らはキリストの福音が生きたものであることを知り、他の何ものにも求めに行かないであろう。彼らは、「ここに生きた力がある。」と言う。教会の歴史を読むと、真の信仰復興が起こったのは、いつも人々がこの『山上の説教』を真剣に受け取り、その光の下で自分自身の姿に直面した時であったことが分かる。世は本当のキリスト者を見ると、自ら罪のあることを感じるばかりではない。心を奪われ引き寄せられる。それゆえ私たちのあるべき姿を明らかにしてくれるこの『山上の説教』を注意深く学ぼうではないか。自分はどのような者になることが出来るかを知るために、これを考察しようではないか。それは、この説教が命令だけを語っているのではないからである。それは、この力の源・供給源をも指し示している。神よ、私たちに恵みを与え、それによって私たちが『山上の説教』に真剣に、率

直に、祈り深く直面できるようにして下さい。そして、ついにはその生きた実例、その輝かしい教えの実証者となる事が出来るようにして下さい。

それが、今晚ここに集まった皆さんの祈りでもあるようにということを願いつつ、これからサラッとこの『山上の説教』の冒頭の部分、『八福の教え』、若しくは『至福の教え』を見て参りたいと思います。

アウグスティヌスという人は、「山上の垂訓は信仰生活の完全な基盤だ。」と言いました。またカルバリーチャペルの創立者のチャック・スミス牧師は、「これらは、イエスの弟子たちの人生の中に存在すべき品性である。」と言いました。ロイドジョーンズが言うように、私たちとは全く無関係の話ではありません。これによって生きるべきもの。これを通して私たちがどうあるべきか、どのようにならなければならないのか。そのことを具体的に示すものであります。イエス・キリストは、ガリラヤ宣教の第一声において、（これはマタイ 4:17 に記録されています。）「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

実はこの『山上の垂訓』というものは、第一声の部分の前半です。「悔い改めなさい。」を表している内容となっています。つまりマタイの福音書 5~7 章の『山上の説教』は、「悔い改める」とは一体どういうことなのか。ギリシャ語で『悔い改める』という言葉は“metanoeo”（メタノイア）と言います。それは、単純に『考えを変える』”changing mind”です。または『方向転換する』というのが、その原意です。これまでの自分の考えとは、全く違った考え方、むしろ正反対、真逆の考え方をすること。それが悔い改めの本質です。特に今から見る『至福の教え』『八福の教え』は、初めて読む者には衝撃を与えます。この世で「不幸だ」と言うことを、「幸福だ」と言うわけです。全くの逆説です。全くの真逆です。有名な聖書翻訳家の J・B・フィリップスという人が、「この世は自分の利益を追求することが幸福の秘訣である。」と言って、この『八福の教え』をもじって、世俗的な处世訓というものを作り上げました。言い得て妙なるものですから、是非ちょっと聞いて頂きたいと思います。『八福の教え』と比べて頂きたいと思います。

『八福の教え』は、マタイ 5:3 から始まります。

- 3: 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。
- 4: 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。
- 5: 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。
- 6: 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。
- 7: あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。
- 8: 心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。
- 9: 平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。
- 10: 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

その一方で J・B・フィリップスが言う「この世において自分の利益を追求することが幸福の秘訣である。」と考える世俗的な处世訓とはどういうものか。

- ①出しゃばり屋は幸いです。その人たちはこの世で成功するから。
- ②冷徹な者は幸いです。その人たちは人生で傷つくことがないから。
- ③不平を言う者は幸いです。その人たちは最後には自分の意見を押し通すから。
- ④遊び飽きて無感覚になった者は幸いです。その人たちは自分の罪について決して悩まないから。
- ⑤人づかいの荒い人は幸いです。その人たちは成果を得るから。
- ⑥世知に長けた人は幸いです。その人たちは世渡りの術を心得ているから。
- ⑦ごたごたを起こす者は幸いです。その人たちは人々の注目を浴びるから。

これが、この世の世俗的な世渡り上手な人たちの処世訓です。これとは全く異なるもの、真逆と言っていいものが、イエス・キリストの説く『至福の教え』『八福の教え』です。この世の中の幸福観、価値観、人生観とはまるで正反対のものです。この世では当然貧しさは歓迎されません。悲しんでいる人とか迫害されている者が幸せなはずなどないと。普通は、一般的には、「面倒なこと、嫌なこと、辛いこと、悲しいこと、苦しいことが起こっていないこと」が幸福の条件だと、この世は主張します。人々が宗教に期待するということは、「悪いことを防いでくれる、災いに遭わないようにしてくれる、嫌なことを排除してくれる」というものです。イエス・キリストはそのようなこの世の幸福観にチャレンジをしています。苦しみに対する恐れ。悪いことが起こりはしないかという不安に縛られて生きるのは、まさにすべてを支配しておられる天の父なる神様を知らない人の姿であります。むしろ私たちは、苦しいこと、辛いことを通して成長させられ、人生の真の喜びを知らされるものであります。順調に進んでいる時には見えない真理や人生の深みが見えてくるものです。困難にあつてむしろ神の真実な支えを体験するものであります。そして、本当の意味で強い者に変えられます。苦しみを除き、できるだけ快適な生活を実現してきたのが、現代の文明である。これには異論がないと思います。楽をしよう、便利がいい、都合の良い方がいい、コンビニエンスがいいと。しかし、その点で最も成功したはずの先進国に心の病が急増し、心の風邪と呼ばれるようなうつ病なども私たちの周りにも沢山見られるものとなっております。社会問題となっているものです。人々の心からは喜びや感謝が失われています。苦しむべきこと、また悲しむべきことは、ちゃんとやはり苦しむべきことが必要であるということ、ちゃんと直視するよにということ。あなたの幸福観がどういうものか。この『至福の教え』『八福の教え』を通して、もう一度吟味して頂きたいと思います。

早速**マタイ 5:1**を見て下さい。

**1: この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。**

この群衆というのは、**マタイ 4:25** からずっと“金魚の糞”のようにして、イエスにくっついて廻っている人たちのことです。数万人はいたと思われませんが、160km 以上もイエスにずっと徒歩で、若しくはロバか何かに乗って、歩いて付いて来た人たちが大半だったと思いますが、大勢の人たちがイエスの周りを取り巻いていました。そこでイエスは山に登ったとありますが、今舞台はガリラヤであります。ガリラヤ宣教をイエスは、今展開しているわけです。先週は、そのカペナウムというところを宣教の拠点とされたという話をしました。ガリラヤ湖の西には高い丘がいくつかあります。ガリラヤ湖の北西にカペナウムというところがあって、その近郊ではないかというふうに見られています。そこには、“祝福の山”、これは『山上の垂訓・八福の教え』を説いた山ということで“祝福の山”と呼ばれている小さな丘があります。海拔は 125m しかありません。ただし、ガリラヤ湖は海拔下 213m です。海よりも-213m と、低いところにあるわけです。ですから、標高 125m の丘でもちょっとした山にも見えるかもしれません。現在はそこに 1930 年にフランシスコ会が建てた“**山上の垂訓教会**”という非常にかわいいチャペルが建っています。イスラエルに行くとそこを訪れることも出来ます。

そして、そこでイエスは『**おすわりになると**』と、座ったわけです。これは、わざわざ記しているのは、ユダヤ人の慣習であつて、説教する時は基本的には立つものです。でも何かを教えたり、説明したりする時には、ユダヤ人は座って教えるということです。そして、教師が座る時には生徒は立ちます。今皆さんは座っていますけれども、2000 年前だったら皆さんが立っているわけです。私が座って教えるというスタイルになりますけれども、2 時間は耐えられないかもしれません。で、ここで『**弟子たちがみもとに来た。**』とあります。群衆たちはずっとイエスの周りを取り巻いて、そして特に病人たちは、イエスに癒して頂きたいとして、癒しばかりを求めてずっとついてまわって来たわけです。不治の病が癒されれば、それも嬉

しいことですが、「病院に行けばお金がかかる。でもイエスに診てもらえば、タダで治してもらえる。しかも瞬間的に癒してもらえる。」ご利益を求めて多くの人たちが、イエスの周りに集まって来たとも言えるでしょう。でも弟子たちは、ここで癒し以上のものをイエスから求めるべくイエスの御許に集まりました。それはイエスの教えを聞くためでした。皆さんと今同じことを、弟子たちはしているわけです。そして、ここで**詩篇 25 : 9**を参照して頂きたいと思います。

### 9 : 主は貧しい者を公義に導き、貧しい者にご自身の道を教えられる。

これは『八福の教え』の第一のものにも通じますけれども、渴いている者に、欲している者に、主は御自身の素晴らしい教えを与えて下さいます。そして**マタイ 5 : 2**で

### 2 : そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。

3節以降がいわゆる『八福の教え』『至福の教え』となります。

### 3 : 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

「幸いです。幸いです。幸いです。」と9回繰り返されています。一体何が幸いなのか、何が幸せなのか。単に物事が思い通りに進むことではなくて、この『幸いです』という言葉は、ギリシャ語で”makarios”（マカリオス）と言います。単純に『神の祝福を受けた』という意味です。英語の聖書では”blessed”という言葉が使われています。”God bless you”の”bless”。これは『神の祝福を受けた』という意味です。ここに幸せの鍵があります。私たちは自分の思いが実現したら、自己実現できたら、夢が叶ったら、幸せだと思うかもしれません。この時期、受験生たちは一喜一憂します。志望校に入れたら、志望大学に入学できたらとか、また就職する者もそうです。首尾よく自分の希望する職場に入社できたら、恋人ができたら、出世できたら、仕事に成功できたら、マイホームを手に入れることができたなら、あの資格がとれたら。家だとか、お金だとか、車だとか、恋愛だとか、友情だとか、仕事だとか、資格、名誉、功績、成功、そうしたものを私たちは手にさえすれば幸せが舞い込んでくる、と思いがちです。

しかし、もしそうであるならば、何故この世の中で成功している人たちが、有名人となった人たち、大富豪が自殺をするのでしょうか、うつ病になるのでしょうか、アルコール中毒になるのでしょうか。幸せそうなカップルも何故あんなにも早く破局を迎えるのでしょうか。相手を、パートナーを取っ替え引っ替えしてしまうのでしょうか。そのような目に見えるこの世の成功は、必ずしも人を幸せにするものではありません。むしろ私たちの幸せというものは、神との関係にかかっていると、イエスは説きます。首尾よく志望校に合格したとしても、神を知らなければ幸福感は長続きしません。好きな人と結婚出来たとしても、神を知らなければやはり不安であります。私たちは自分を造って下さった創造者である神を離れては、本当の意味では幸せになりません。それは、アウグスティヌスという人が言った通りです。「**神の御手の中になれば、私たちは唯々不安ばかり。造り主の手に握られた時に私たちは憩いを得る**」と。神だけが私たちのすべてを知って、私たちに真の満足と喜びをもたらして下さい。どんなことにも揺るがされない、絶対的な平安というものを与えることが、お出来になります。この幸福を損なうものというのが、神との関係を破壊する『罪』というものです。この『罪』が、神との関係を破壊するので、私たちは「満たされる状態」から「満たされない状態」、「欠けた状態」、「空洞の空いた状態」に陥るわけです。だからこの世で目に見える欲しいものを手に入れても、夢を叶えたところでも、その空洞は埋まらないわけです。

「何をしても虚しい」、パスカルが言う通りです。神にしか満たすことの出来ない空洞が、私たちの内に（心の中に）空いているわけです。それは、神様にしか満たすことの出来ない、解決することの出来ない問題です。つまり、神との関係が正しくなければ、人はどんな努力をしても幸せにはなれないということです。

本物の幸せが『マカリオス』『マカリオ』。それは「神との正しい関係を持つ」ということ、「神に祝福されている状態」「神の祝福を自らも喜び、感謝すること」が、人間にとっての真の幸福であります。それは逆境においても得られる完全な平安、満たしであります。この世の中の幸福観、価値観、人生観とは真逆なもの、正反対なものということです。貧しさは確かに歓迎されません。悲しんでいる人が幸せなはずなどない、迫害されている者が、悪口言われる者が、罵詈雑言言われる者が、どうして幸せなのかと、首を傾げてしまいます。聖書は一体何が言いたいのか、イエス・キリストは一体何が言いたいのか。そのイエスのチャレンジに、しっかりと私たちも向き合いたいと思います。クリスチャンとはこの地上で最も祝福された人たち、最もハッピーな人たちと言って良いと思います。丁度この『山上の垂訓』『山上の説教』というのは、まさにクリスチャンの完全な基準でもあり、またイエスの弟子たちの人生の中に存在すべきである品性であると言われている通りです。これが私たちの内に見られるものでしょうか。私たちはこれに沿って歩んでいるのでしょうか。その幸せな人生の第一ステップが**3節の『心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。』**であります。よく『心が貧しい』と日本語で言うと、あまり良い意味にはとられません。通常は「あの人の心が貧しい」と言う時、それは否定的な意味で「卑しい」とか「乏しい」とか「貧弱」「心が狭い」「愛が無い」。「心が貧しい」とはそういう意味でよく使われます。または氣力に欠けた人、思いやりのない人。「懐は貧しくても、せめて心だけは豊かでいようじゃないか」みたいなこともよく言います。ですから日本人が使う時、「心が貧しい」というのはいつも悪い意味であります。この『貧しい』というギリシャ語は、実はギリシャ語の中には貧しさを表す名詞が2種類あります。一つは『ペネース』という言葉、もう一つは『トハース』”ptochos”という言葉。『ペネース』というのは、“少し貧乏”、その一方で『トハース』という言葉は、“極端に貧乏”。物乞い、乞食を表す言葉です。ここの『八福の教え』のまず第1訓のところでは使われている『貧しい』は、後者の『トハース』です。つまり“極端に貧しい”物乞い、乞食状態ということです。ですから「心が極端に貧しい」というのが実際の意味であります。ただでさえ日本人が「心が貧しい」という時は悪い意味ですから、「極端に貧しい」なんて言ったら、もう最悪の状態。これ以上の不幸はないと思われがちですけれども、混乱されがちです。でもここを正しく読み解くには、『心』という言葉の正しく解釈する必要があります。この『心』というのはギリシャ語で『プニューマ』”pneuma”と言います。直訳は『霊』”spirit”です。ですから『心』ではなくて、『霊』において貧しい者は幸いです。というのが正しい訳となります。今後は日本語の聖書も『心の貧しい』という言葉の正しく直すと思います。度々これは誤解をもたらしてきたものですから、正しくは『霊において貧しい者は幸いです。』それがこの箇所を正しく理解するための鍵となるキーワードです。勿論イエス・キリストはギリシャ語で話されたわけではありません。ここはユダヤ人ですからヘブル語を使って話されたはず。ヘブル語の場合、この『貧しい』は『アニー』”aniy”という言葉です。この『アニー』というヘブル語の意味は、「ただひたすら神により頼む」という言葉です。詩篇の中に、この『アニー』が使われている箇所があります。詩篇**34：6**には、『この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。』悩む者というところに『アニー』が使われています。本来は、「ひたすら神により頼む貧しい者」という意味です。または同じく詩篇**68：10**。『神よ。あなたは、いつくしみによって悩む者のために備えをされました。』ここでも『悩む者』と訳されていますが、原語は『アニー』、「神にただひたすらより頼む貧しい者」ということです。ですから『心の貧しい者』とは、「霊において貧しい者」、「神なしでは生きてくことが出来ない者」、「霊的破産者である」という意味となります。

では実際に神なしで生きる方法はあるのでしょうか。そんな生き方あるのでしょうか。あります。私た

ちは、キリストを知る前はまさにそうやって生きてきたわけです。生きているつもりだったわけです。それは物質に頼る生き方です。勿論物やお金が無ければ、食べ物が無ければ生きていけないわけですが、すべてはバランスの問題です。人はパンだけで生きるのではなく、(パンも必要です。でもむしろ) 神の口から出るひとつひとつの言葉によると。それがまさに私たちの霊を養うものです。神の言葉。物やお金を頼りにし、それを絶対視するような、それらを偶像化するような生き方は避けなければなりません。なぜならばそれらは必ず裏切るから。そのようなものに頼る生き方こそ、日本人が言うところの『心が貧しい生き方』と言っていいと思います。聖書において貧しい者というのは、神に依頼む者の代名詞です。心の貧しい人、霊において貧しい人、というのは、極端に貧しい人というのは、自分の無力さを知っていて、自分の持つ何かに頼らない人のことを指します。自分の健康、財産、家柄、学歴、才能、資格、どここの会社に勤めているか、どこに住んでいるか、そういった人生の拠り所を目に見えるものに置かないということです。それらが究極的には、何の当てにもならない、頼りにならない、ということを知っている人が霊において貧しい人であります。自分自身が霊的に貧しい、極端に貧しい、霊的破産者である、全く弱くて罪深い者である。そういうところに気付く者は幸いです。自分自身に対する態度をここでは扱っています。つまり、自己満足する者、自負心を持つ者、プライドの高い者、うぬぼれている者。それが心の貧しい者とは正反対の言葉です。自分は出来る、自分は大丈夫、神なしでも生きていける、これがあるからあれがあるから、という人はむしろ不幸なわけです。だれでも神様に会った人は、自分自身の霊的貧しさ、極端に自分は貧しいこと、破産状態だということを必然的に覚えます。旧約聖書の偉大な預言者イザヤのことを思い出して下さい。ユダヤの民とその周辺諸国に対してイザヤは、**イザヤ書の1〜5章**にかけて何度となく「あー、あー、あー」という言葉を述べています。「あー、あなたがたはもうだめだ。あなた方には災いが来る。」何度も繰り返しイザヤは、ユダヤの民、周辺諸国の民に警告を与えていました。「お前たちは何と罪深い者よ。何という災いだ。」呪われている、裁かれる、というような言葉でずっと断罪してきたわけですが、しかし突然**6章**に入ってから今度は「あー、私はもうだめだ。」と言い出しました。それ以前は、**1〜5章**はユダヤ人たちを見て、又は周辺諸国の異教徒たちを見て、「あー、お前たちはもうだめだ。もう終わりだ。もう裁かれる。」と言っていたのに、**6章**になって、どうして急に「あー、私はもうだめだ。」と彼は言い出したのでしょうか。それは**6章**の頭を見て頂ければ分かります。イザヤは神を見たんです。その神の栄光とは、ヨハネの福音書によれば、イエス・キリストの栄光であると言われていています。その神と出会ってしまったら、イザヤは自分自身の罪深さに気付いたわけです。神は光だと言われていますが、光に近づけば分かると思います。近づけば近づくほど自分の影が長くなる、伸びるということが分かります。神に近づけば近づくほど、自分自身の罪深さがはっきりしてきます。自分が如何に罪深い者か。ペテロもガリラヤ湖の舟の上で、イエスが神の子であることに気付いたその瞬間、「主よ、離れて下さい。私は罪深い人間ですから。」それが神に出会った人のリアクションです。もしあなたが神に出会ったら、「私は大丈夫、何の問題もない。」という考えは消えて無くなります。神様に会ったら、自らの罪深さに誰もが気付きます。光が長くなれば影が長くなるように。**第一テモテ 1 : 15** も見て下さい。パウロという人も神に出会ってしまったんです。復活のキリストに出会って、“目からうるこ”の体験をしました。そのパウロの言葉として**第一テモテ 1 : 15**をお読みします。

**15 : 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。**

パウロは『私はその罪人のかしらです。』と。偉大な使徒、スーパークリスチャン、新約聖書の大半を書いたあのパウロが、「私は罪人のかしらです。」と。森永製菓の創業者である森永太一郎さんも晩年はクリ

スチャンとして悔い改めて、全国をまわって、「私は罪人のかしらです。」と言って、へりくだって福音を宣べ伝えたと言われています。キリストに出会ってしまったら、だれもが異口同音に「私は一番罪深い者です。私こそが罪人の親分です。」と。そのように罪深さに気付くものであります。誤解して頂きたくないですけれども、心の貧しさというのは、自己卑下をしたり、自分は価値が無くて、弱くて、何も出来ない、弱々しい人間になるという意味ではありません。そうではなくて、聖なる神の御前に立って自分の貧しさ、無力さを悟る時に、私たちは逆に強くなれる、大胆になれます。なぜならば、こんな私でも、こんな罪深い、罪の塊りの私でも、神の恵みによって罪赦され、神に愛され受け入れて頂いている。こんな嬉しいことはありません。平安で満ちています。喜びで満ちています。自分の力でもはや立っているではありません。神の力の支えによって立っているわけです。ですから何も恐れないわけです。

次に4節に、『悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。』

『悲しみ』という言葉はギリシャ語で『ペンテオー』"pentheo"と言います。この『ペンテオー』という言葉は、極端な悲しみを表す言葉です。流れも是非意識して下さい。もし、あなたが自分が罪人である、霊的破産者である、神なしでは生きていけない、ということに気付いたならば、あなたは必然的に破産者である、神なしでは生きていけないということに気付いたならば、あなたは必然的に自分の罪に対して今まで以上により一層嘆き悲しむようになります。それは神様が罪というものを嘆き悲しむように、嘆くようになるということです。今までは平気で犯していた罪も、もう平気ではなくなるわけです。神様がこの罪をどのようにご覧になるだろうか。そして、ただ嘆くだけではなくて、神の用意して下さる罪の解決を同時に求めるようになります。自分で罪をカバーするとか、言い訳して誤魔化そう、そのような者は本当の意味では自分自身の犯している罪を全く悲しんでいない者であります。普通人は悲しいと悲しみを和らげたりします。そのために人は、やけ食いをするとか、悲しいから発散するようにして、忘れ去るようにアルコールを浴びてみたり、またカラオケで憂さを晴らしてみたり、吉本喜劇に行ってみたり、いろいろとやるわけです。これでもかという不幸が主人公に襲うようなドラマを見るわけです。韓流ドラマか何かを見てお婆さんたちが涙流しながら、「可哀そう、可哀そう」と言いながら、悲劇のヒロインに同情して涙を流す。この世は悲しみをそのようにして忘れようとか、面白おかしく楽しくやれというわけです。でも、イエスは逆のことを言います。イエスも悲しんだんです。ただし、イエスの悲しみは神に背いて滅びる人々のためでありました。ルカ 19 : 41 をお聞き下さい。

41 : エルサレムに近くなったところ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、

42 : 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。

続きもございますけれども、イエスのご自分をメシヤとして公に現されたわけです。雌ロバの子の背に乗ってゼカリヤの預言を成就し、そして公の場でユダヤ人の王として礼拝を受けることを許され、ハッキリと「私こそがメシヤである」ということを示されたにもかかわらず、ご自分の民は、エルサレムの住民は、イエスをメシヤと知りながら拒む。拒否して、信じないで、しかも「除け、除け、十字架につけろ」と言って、神の救いを完全に突っぱねる。それをイエスは予見されたので、滅び行く彼らのことを思うともう涙を流さずにはいられなかったわけです。神に背いて滅びてしまう人たちのことを思えば、涙を流さずにはいられなかった。この『都のために泣く』という言葉は、ただしくしく泣くどころではありません。『号泣する』という言葉です。またパウロのケースも皆さんにお伝えしておきたいと思えます。



私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。  
(ローマ 7 : 24)

パウロは自分の罪に悲しんでいます。嘆いています。私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから。なんて不甲斐ないのか。自分でしたいと思う善を行わないで、かえってしたくない悪を行ってしまう。何故こうも自分は同じ事ばかり繰り返して、情けない。

でも神は自分の罪を嘆き悲しむ者を慰めて下さるということです。自分の罪を嘆き悲しむ者は、自分の罪を負って下さった方、十字架にかかって死んで下さったお方、イエス・キリストの愛に感謝します。自分自身の罪に打ちのめされた時、「あなたの罪は赦された」というイエス・キリストの声に安堵します。ホッとするんです。イエス・キリストは、あなたの罪を見て、決して断罪しません。姦淫の現場で捕らえられた女に対するイエスの応答を思い出して下さい。ヨハネの福音書 8 章にそのやりとりが記録されていますが、イエスはそんな彼女に対して「もう罪を犯してはなりません」。彼女を赦して、彼女を行かせました。罪に対する態度、罪に対する悲しみ、それは自分自身の罪に対してもそうですし、他人の犯した罪に対してもそうですし、罪そのものに対して、皆さんはどういう態度をとっているのでしょうか。あまりにも軽率な態度をとっていないでしょうか。ちょっとぐらい、このぐらいとか、全く無頓着に「しょうがない。私は弱いですから。」開き直るかのように。または弁解したり、自分の罪は大目に見るけれども、人の罪は大目には見れない、許せないと。第二コリント 7 : 8~10 も参照して頂きたいと思います。罪に対して本当に嘆き悲しむとは、どういうことか。または本物の悔い改めとはどういうことか、ということがこの箇所を書いてあります。

- 8 : あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、
- 9 : 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。
- 10 : 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。

自分の罪に対して誰もが悲しみます、後悔します。「やらなければ良かった。言わなければ良かった。こんなことだったら。損した。」とか、いろいろと悲しむわけです。でも『神のみこころに沿った悲しみ』と『この世の悲しみ』は、全く質が異なるということを知って頂きたいと思います。それは丁度実例で挙げるならば、ペテロとユダの姿です。ペテロとユダも同じく主人を裏切ったわけです。同じ罪を犯したわけですが、でもその後の彼らのリアクション、それはペテロの場合、神のみこころに沿った悲しみとなり救いに至るものとなったわけですが、ユダの場合は世の悲しみとして自らの首をくくって自らを断つ。神の助けを借りずに自分で始末する。一見この世ではそれが「侍魂」のように思うかもしれませんが。腹を切ると。すべて腹を切れば解決するのではありません。自殺すればすべて解決するのではありません。それこそまさに人間の傲りおごりというものであります。罪というものは、そんな自分の命ひとつですべてまかなえるものではないのです。もしあなたの子供が誰かに殺されたとします。娘がレイプされ無残にも殺され、肉体の一部すらその犯人によって食されたなんてことになったらどうでしょうか。「そんなやつは死刑だ」と。実際に死刑になって、気が晴れるでしょうか。その凶悪犯の命をもってすべてが贖われるでしょうか。そんなことはないわけです。死んだ者の命は帰って来ませんし。法によって裁かれたところで、すべて解決するということはないわけです。罪というものは神様にしか正しく裁くことも出来ませんし、正しく処理

することは出来ません。ましては罪を贖うということは、神様にしか出来ないことです。この罪の世の悲しい体験、罪がもたらす悲しい顛末<sup>てんまつ</sup>、悲劇、刈り取りというもの。そうしたものですら神は慰めて下さると、ここで教えて下さっております。この世におけるありとあらゆる不正、不条理、悲しみ、痛み、苦しみ、ありとあらゆる矛盾、不満、そうした罪の結果、今、目の前にある世界はすべて終わる日がやって来ます。そしてイエス・キリストが来臨されることによって、神の義と神の愛が完全に調和し、実現する世界がもたらされます。その際には本当の意味で、究極的にすべての人が慰められるという日がやって来ます。

**黙示 21 : 3~4** にこう書いてあります。

**3 :** そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、  
**4 :** 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

神に対する罪というものを悲しむ者は、神ご自身の慰めを体験出来ます。だから幸いです。悲しみを和らげようとしてはいけません。悲しみをしっかり受け止めて、むしろしっかりと悲しむべきです。神に対する罪、それを直視して悲しむべきです。そしてその罪がもたらす結果も、刈り取りも悲しむべきです。でも、そんな悲しみを神は慰めて下さいます。勿論罪を犯さない方が良いに決まっていますけれども、たとえ罪を犯してしまったとしても絶望的になってはならない。しっかりと罪を悲しみ、悔い改めて、その結果も悲しみながらも、神の慰めを受けて頂きたい。それがここでのメッセージです。

## 次に 5 節

**5 :** 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。

イエスの教えはすべて新奇なものではありません。イエスの教えは旧約聖書に多く見られるものでもあります。これもその内のひとつです。**詩篇 37 : 11** に似たような言葉があります。お読みしますから聞いて下さい。

**11 :** しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。

リッチな人は、金持ちは地を受け継ぐと、思われがちですけれども、貧しい人は地を受け継ごう、とあります。『柔和』という言葉は、これは他者に対する態度です。先ほどの『悲しむ者』というのは自分の罪に対して悲しむ者。自分の罪に対する態度を表していましたが、この『柔和』は自分ではなくて、他者に対する態度を表しています。これも誤解してはいけません。『柔和』とは『柔弱』とはわけが違います。『柔弱』『軟弱』と言っても良いかもしれませんが、精神や体が弱くて困難に耐えられないこと。『柔和』とは弱々しいイメージを持つかもしれませんが、全く逆です。むしろ『柔和』というものは、『コントロールの下にある力』を意味する言葉です。ギリシャ語でそれを『プラウス』"praus"と言います。『プラウス』というギリシャ語は、『コントロールの下にある力』を表します。丁度ニュアンスとしては、用例として「手に負えない荒馬を調教して、乗れるようにする状態」それが『プラウス』です。コントロールの下にある力。大型犬が小型犬とじゃれて遊ぶ姿。その力を行使してしまえば、小型犬をつぶしてしまうかもしれま

せん。かみ殺してしまうかもしれません。でも敢えて小型犬には好きにさせて、大型犬はただドッシリ構えて、一緒に遊んであげる。それはコントロールの下にある力、『柔和』であります。セルフコントロールが出来ている人、あるいは神によって、若しくは神にのみコントロールされている人、その人が柔和で、その人こそ幸いである。その人は地を相続するから、と言われていました。『地を相続する』というのは単に不動産を相続するということではありません。地上の生涯において成功することです。ビジネスの世界では、アンガー・マネージメント”anger management”というのがもてはやされています。『アンガー”anger”』というのは英語でいう『怒り』です。『怒り』をマネージする。『怒り』をコントロールする。それをアンガー・マネージメントと言います。前にもこれについてブログに書きました。それはどういうことかと言いますと、マイナスの結果を引き起こしがちな『怒り』に正しく対処することで、健全な人間関係を作り上げる知識と技術。それをアンガー・マネージメントと言います。怒りによって私たちは、これまでにどれだけの失敗や後悔をしてきただろう。カッとなってしまった。あんなこと言わなければ良かった。しなければ良かった。そんなつもりで言ったのではないのに。そういうつもりで言ったわけではない、と言われてもそうは思えないとか。他愛もないことで、すぐにブチ切れて、カッとなって、夫婦げんかになってしまう。ちょっとしたことで、カッとして切れてしまう。親子喧嘩が絶えない。<sup>よめしゅうとめ</sup>嫁姑の大戦争、一触即発。喧嘩別れした友人・知人・恋人。たった一言でビジネスチャンスを失う。人間関係を台無しにしてしまう。こういったことはいっぱいあります。柔和とはコントロールの下にある力です。モーセという人は、地上のだれにも優って非常に謙遜であったと**民数記 12 : 3**にあります。その謙遜という言葉は実は『柔和』という言葉です。モーセは地上の誰よりも、勿論イエス・キリストを除いて、人類史上最も柔和な人だったと。そんなモーセでも一度だけブチ切れたことがあったわけですが。でもたった一度だけです。勿論神に召される前は、エジプトでまだ王位継承者として、パロの後を継ぐ者であったその時には、怒って同胞をいじめているエジプト人の奴隷主人を殴り殺してしまったことはありました。でもそれは、ただカッとなったというよりも、むしろ殺されそうになっているヘブル人の奴隷を助けるためでもありました。イエス・キリストこそが勿論最高に柔和な人であります。**マタイ 11 : 29**でイエスご自身が『わたしは心優しく、へりくだっている』とご自分の性質、性格について証してしております。『心優しく』という言葉が実は『柔和』という言葉です。ですから、言い換えれば『わたしは柔和でへりくだっているから』。それがイエス・キリストであります。イエス・キリストが唯一ご自分の性格を述べたところです。特徴づけられています。イエスの性格は柔和である、へりくだっているということです。霊的貧しさに気付き、自分の罪を嘆き悲しむ人は、自分が柔和であることにいつの間にか気付きます。その人は自分自身を誇示しません。見栄を張りません。神の力の下にひれ伏して、神の教えに対して素直に服従します。ですから常に感情を抑えることも出来ます。これまでの一連の流れに是非注目して下さい。まずは霊的貧しさに気付くということ。そして罪を嘆き悲しむようになり、柔和になった自分に気付くというこの流れです。自分自身をもう誇示することがない、虚栄心を抱くこともないということです。

そうすると自然に**6 節**に続きます。あなたは飢え渴く思いを感じるようになります。なぜなら余計なもの、有害なものを捨て去って、自らを空っぽにしたからです。**6 節**に目を移して下さい。

## **6 : 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。**

世の中を見渡して頂ければ、多くの人たちは満たされていないことに気付きます。満たされているようで満たされていない。虚しさを感じている。その理由、考えてみて頂きたいと思います。それは実は単純な理由です。彼らが未だ心と思いを空っぽにしていないからです。つまり胃袋を空っぽにするように飢え渴く状態にしていない、空腹にしていないからです。この世のジャンクフードばかり食べてしまっ

ているので、飢え渴きがなくなっているわけです。彼らはもう自分のことで頭が一杯です。自分が一番大事。自分の仕事、自分の健康、自分のビジネス、自分の家、自分の財産、自分の車、いろんなものにとらわれていますが、すべて自分です。自分自身、自分のプライドにとらわれているわけです。自分の願望、自分の欲望を実現することに躍起になっています。自分の義を立てようとしします。「私は間違っていない。あの人が間違っている。私は正しいと。」だから彼らは義に渴いていないのです。イザヤ 64 : 6 を見て頂きたいと思います。

**6 : 私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。**

特に 6 節の中で『私たちの義はみな、不潔な着物のようです。』不潔な着物、聖書の欄外に月の物で汚れたと書かれています。すなわち女性の月経で汚れたということです。生理で汚れたナプキン・タンポンということです。露骨な表現ですが、これが聖書の直訳です。人間の立てる義というのは、神の目から見たら忌み嫌われるべきものだということです。「私は正しい」その態度です。「自分是可以る」その態度。この『義に飢え渴いている』というのは、神に対する態度を扱っています。先ほど『柔和』という言葉を見ましたが、それは他者に対する態度を扱っていましたが、この『義に飢え渴いている』という状態は神に対する態度を表しています。つまり霊的な事柄に対して飢え渴きを感じるということです。渴いている状態です。これを感じないというのは、自分のことで頭がいっぱいだからです。この世のジャンクフードばかり食べているから霊的なものに食欲が湧かないわけです。聖書を読みたくなる、祈りたくなる、教会に行って礼拝をささげたくなる、クリスチャンたちとの交わりを持ちたい。それは義に飢え渴いている状態を表しています。そういった渴きがなくなる時、その人の心の中はすべてその人自身で埋まっています。自分、自分、自分です。自分の夢、自分のやりたいこと、自分の欲望、自分の仕事、自分の家族、自分の健康、自分のお金。そういったものでいっぱいになると、この義に対しての飢え渴きは損なわれてきます。

そして 7 節に目を移して下さい。

**7 : あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。**

ここも詩篇 41 : 1 を見て頂きたいと思います。

**1 : 幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。主はわざわいの日にその人を助け出される。**

さらに詩篇 18 : 25 も参照して頂きたいと思います。

**25 : あなたは、恵み深い者には、恵み深く、全き者には、全くあられ、**

イエスも同様のことをここで説いているわけです。『あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。』もしあなたが自分自身を空っぽにするならば、神様はご自分の愛で、あわれみで、あなたの心を満たして下さい。神の愛で満たされたいと願うならば、あなたは先ず自分自身を空っぽにする、義に飢え渴く状態に置かなければいけません。その結果、神は御自身の愛であなたを満たして、そしていつの間にかあなたに無い愛がそこから生まれて、流れて、周りの人たちを愛することができるようになります。赦す心が与えられます。あんな人許せなかったのに、赦す気になってしまうのです。とてもあんな

人愛せなかった。と思う人を愛するようになってしまうのです。義を求めて生きる人ほど、ますますあわれみ深くなります。逆に罪深い人間ほど、自分のことばかり考えている人間ほど、他者に対して冷酷非情になります。非難ばかりする、批判的になります。ルカ 18:9 を開いて下さい。実例がそこに見られます。

**9: 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。**

「私は間違っていない。私は正しい。あいつらの方がおかしい。あいつら何も分かっちゃいない。」自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対して、イエスはこう言われます。ルカ 18:10~14

**10: 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。**

**11: パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。**

(先週、取税人とはどういう人か説明しました。最も忌み嫌われていた人です。)

**12: 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』**

**13: ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』**

**14: あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』**

義を求めて生きる人ほど、ますますあわれみ深くなり、逆に罪深い人間ほど、他者に対して非情で批判的になります。『あわれみ深い者』と言われている言葉は、ギリシャ語で『エレエモン』"eleemon"と言います。『エレエモン』という言葉は、新約聖書で2回しか使われていない言葉で、1回はこのマタイ 5:7ですけれども、もう一つはヘブル 2:17に見られます。お読みしますから聞いて下さい。

**17: そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。**

『あわれみ深い、忠実な大祭司』とは、勿論イエス・キリストのことです。イエス・キリストこそあわれみ深い者の究極の姿です。『あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。』あわれみを受けるとあります。あわれみとは、私たちの努力や功績によって勝ち取るものでも、私たちが払った犠牲に対する報酬でもありません。イエス・キリストは、罪深い私たちを無条件であわれんで、その罪を赦して下さいました。義というものも同じです。この神の義というものも努力して勝ち得るものでもありません。私たちの義ではなくて、キリストの義というもの。それは与えられるものです。単純に受け取るものです。それが信仰です。行いによるのではなく、恵みによるものです。ただ差し出されたプレゼントを感謝して頂くこと、それが信仰です。

で、テキストに戻って下さい。マタイ 5:8。

**8: 心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。**

この『心』は、「心」と訳していい言葉です。3節の『心の貧しい』の『心』は、「霊」という言葉ですが、この8節の『心』はそのまま「心」と訳されるべき言葉です。『きよい』と「きれい」は、異なるということを知って頂きたいと思います。イエス・キリストを信じることによって罪深い心は、その尊い血潮によって洗い清められます。雪よりも白くされるわけです。この『きよい』とは、英語の聖書では“pure”という言葉が使われています。心が“pure”な人。心が“clean”な人とは違うのです。例えば石鹸は“clean”ですけれども、みな石鹸は“pure”ではありません。100%ナチュラルではありません。添加物が入っている物もあるわけです。防腐剤とか、合成香料とか、殺菌剤とか、変質防止剤とか、タール色素とか、合成界面活性剤とか、保湿剤、いろいろなものが石鹸には含まれています。“pure”なものは、「混じりけのないもの」、余計なものが入っていない。ですから『こころのきよい者』、心の“pure”な者は、余計なものにはとらわれない状態を指しています。混じりけのない純粋な状態です。心が“pure”じゃないと、神を見ることは出来ません。クリスチャンになっても神を見失ってしまうことがあります。皆さんにはどうでしょうか。「神様が見えなくなっちゃった。」そういう時がこれまでなかったのでしょうか。そういう時には、あなたの心が“pure”じゃない時です。何か混じりけがあって、そこに何か邪魔するもの、余分なものが入り込んでしまっている。何らかの香料かもしれません。何らかの色素かもしれません。何らかの添加物かもしれません。そうしたものに目が奪われてしまっている間、私たちの目は神を見る事が出来ません。

第二テモテ 2 : 22 に同じ言葉が使われています。

**22 : それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心 (pure な心) で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。**

成熟した、安定したクリスチャンたちは、きよい心の持ち主であります。彼らは主を見ている人です。主が見えている人の所に行きなさい。情欲に駆られた時、きよい心で主を呼び求める、成熟した、安定した、落ち着いたクリスチャンたちの所に行きなさい。彼らはきよい心を持っている。彼らは神を見ることができると。また他にも参照して頂きたい箇所があります。復活のキリストが弟子たちの前に現れたところです。ルカ 24:15 では、二人の無名の弟子がエマオという村に行く途上で復活のキリストに出会うのですが、最初それがキリストだと分からずに彼らは話をしています。

**15 : 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。**

**16 : しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。**

そして、飛んで 25 節

**25 : するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。**

と言って、その後に 31 節で

**31 : それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。**

とあります。イエスのことが見えなくなってしまった時があるわけです。このエマオの途上の二人の弟子は、「イエス・キリストが十字架につけられて、死んで、葬られてしまった。」イエスが復活したとは信じていません。完全に愛する主を失って彼らは絶望的な状態にありました。絶望的な状態にあると、主が見えなくなるわけです。そして信じない、心の鈍い状態になって、そこにはもう“pure”な心はありません。心のきよい者、“pure”な人は幸いです。その人は神を見るからです。イエス・キリストが彼らの目を開い

て下さいました。その瞬間は聖餐式の時に訪れました。丁度 **30 節**を見て下さい。

**30**：彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。

**31**：それで、彼らの目が開かれ、

とあります。心がきよくされたその瞬間、それは聖餐式の時でした。その前から道すがら、イエスとは知らずに彼らはバイブルスタディーを受けていたわけです。御言葉から教えられているうちにだんだん心が燃えてきたわけです。もっとイエスと聖書について話し合いたい。聖書の中に書かれている約束のメシヤについてもっと知りたい。そして一緒に夕食をとり、そしてその時に聖餐式も行われて、彼らはその時に目が開かれたわけです。主だと分かったわけです。今私たちがやっていること、それは御言葉の洗いを持つことです。きよくない心、いろいろなものが心の中に渦巻いている時、私たちはイエスを見る事が出来ません。それは信じないという疑いの心、鈍い心、または絶望してしまっている心、悲しんでしまっている心、マグダラのマリヤも最初イエスとは気付かずに園の管理人だと思ってイエスと話した場面もありました。それはもう悲しみで目がふさがれていたわけです。でも、心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。詩篇 17：15 もお読みします。

**15**：しかし、私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。

神を見る時、私たちは初めて満ち足りるのです。誰もが神を見たいと願っています。そのためには心がきよくなければいけません。勿論このきよさは、自浄作用で作りに上げる事が出来ないものです。ダビデは悔い改めの詩篇 51 篇で、それはバテシェバと不倫をし、そしてその不倫を隠ぺいするためにバテシェバの夫ウリヤを謀殺した後、その罪が発覚して、そして実はバテシェバが妊娠してしまったのですが、その妊娠の結果生まれた子供も生まれてすぐ死んだわけです。で、そして自分の罪を招いてしまった数々の悲劇を前にして、彼は心底悔い改めたわけです。ナタンに指摘されて、もう彼は認めざるを得なくなって、その瞬間に「私は主に対して罪を犯しました。」神に対して罪を犯しましたと。その後に悔い改めた時に歌ったのが詩篇 51 篇です。その 51 篇 10 節の中でダビデはこう言っています。『私にきよい心を造って下さい。』きよい心、それを『造ってくれ』とありますが、『造る』という言葉はヘブル語で『バーラー』"bara"です。『バーラー』とは創世記 1 章 1 節の言葉。『初めに、神が天と地を創造した。』の『創造』です。その『バーラー』は、無から創造するという事です。神様だけが無から創造する事が出来ます。人間は何も無いところからものを作る事は出来ません。何かの素材、材料を使ってでしか、私たちはものを"create"することは出来ません。でも"Creator"の神様は無から創造出来ます。で、きよい心を造って下さい。これは『バーラー』ですから、自分の罪を犯してしまった汚れた混じり気のある心を使って、それを造り直して下さいと言っているのではありません。もはや新しい心、混じり気の無いピュアな心を、クリーンな心を、私のために新しく造って下さい。キリストにある者は皆新しく造られた者です。第二コリント 5：17 に書いてます。

**17**：だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

心も刷新されるのです。神を見ることのできる心が神によって創造されるということを感じて欲しいと思います。

次にテキストの **9 節**。マタイ 5：9 です。

## 9: 平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。

世界平和を訴えるために反戦運動が展開されます。平和の歌、反戦の歌などが歌われます。ジョン・レノンの『イマジン』が歌われたり、また『We are the world』が歌われたり、プラカードを持って世界の不平等を正そうじゃないか。ここで言われているのは、そういう活動・運動のことではありません。『**平和をつくる者は幸いです。**』というのは、最高の平和活動をここでイエスは説いています。それは『**平和の君**』と呼ばれるお方、**イザヤ 9: 6**に『イエス・キリストは平和の君、**prince of peace**』と呼ばれてます。その平和の君であるイエス・キリストを宣べ伝えること。**エペソ 2 章**にも「イエスこそが、キリストこそが平和である」と、平和とはイエス・キリストであるということです。そのイエス・キリストの姿に感銘を受け、感化されたのがマハトマ・ガンジーです。ガンジーは勿論ヒンズー教徒でしたけれども、ガンジーが最も愛読したのは、ヒンズー教の経典ではなくて、新約聖書でした。そしてガンジーがモデルにしたのが平和の君イエス・キリストであります。ガンジーが基にしたのがこの『**山上の説教**』だったわけです。他にもキング牧師も、勿論ガンジーにも影響を受けました。ディートリッヒ・ボンヘッハーというドイツの牧師もナチス・ドイツに抵抗した有名な牧師です。彼もまた平和の君イエス・キリストになろうとしたわけです。その平和の君であるイエス・キリストを宣べ伝えることこそが最高の平和運動・活動であるということです。**エペソ 6: 15**に平和の福音を伝えることが私たちクリスチャンに求められていると。平和の福音の履物、それを私たちは履いて、行くところどこでも平和の君イエス・キリストを宣べ伝えること、福音伝道するということ、これが最高の平和活動であると。ただ単にキリスト教を布教して、教会を拡大する、勢力を伸ばす、そういったことを言っているではありません。私が言っているのは宗教ではないのです。私が言っているのは、イエス・キリスト御自身を宣べ伝えるということです。イエスと出会う人々は変えられるのです。人々が平和の福音を聞いてイエス・キリストを平和の君として心に迎えるとき、その人の心の内に平和がやって来ます。平安が訪れるわけです。で、そういった人たちは争うことをしません。人を赦すということを選ぶようになります。人を愛するということを選ぶようになります。イエス・キリストは自分自身を十字架刑にした者たち、死刑執行人たちを見て、「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているのか自分で分からないのです。」と。「でもキリスト教徒たちは戦争ばかりやっているじゃないですか。」それは確かに事実かもしれませんが、でもハッキリ言いたいのは、その戦争をやっているのはキリストの名を借りた自称クリスチャンたちであるということです。イエス・キリストの弟子たちは、そんなことは絶対にしません。イエス・キリストがやらないことをやっているならば、それはもはやキリストの弟子、クリスチャンとは言えないと聖書からそうハッキリ言えます。ですから勿論戦争ばかりするのがキリスト教徒だけではありません。他の宗教も、無宗教も、無神論者も、共産主義であろうと、人間は皆心に平和がありませんから、誰でも戦争はします。戦争の原因もヤコブの手紙に書いてあります。それは人の欲望です。欲しくて手に入らなければ、人は戦争をするわけです。でもその欲望が原因だということを知られたくないので、大義名分をつくるわけです。宗教を借りるわけです。国家神道という隠れ蓑をもつわけです。キリスト教という旗印を掲げるわけです。イスラム教、アラーの名によってとか。いろんなことを人は言いますが、それは宗教戦争ではありません。それは単に人の欲望の争いであります。でもそんな争いばかり起こす欲望に駆られた人間のうちに、イエス・キリストは平和をもたらすことが出来ます。で、この『**平和**』という言葉は、ギリシャ語では『エイレーネ』と言って、「平和・平安」と訳されますが、特に「結び合う、神と結び合うことによって得られるもの」です。今私たちが見ている幸いな教え、『**八福の教え**』。これは神との関係が正しい時に与えられる真の幸福だと言っておりますけれども、平和、『エイレーネ』は、共に結ばれる、神と結ばれるということです。そもそも宗教という英語も『**レリジョン**』と言いますが、『**レリギオ**』という「結ばれる」という言葉が原意となっております。これは神と結ばれることによって得ら



れるもの。それが永遠の命であり、救いであります。それが神との関係から来る平安・平和というものです。ヘブル語では、平和・平安のことを『シャローム』と言います。これは是非覚えて頂きたい用語です。根本的な意味は『相互関係において調和がある』ということ、それは単純に『平和・平安』というだけではなくて、また『無事平穩』という意味だけではなくて、それらでは消極的過ぎます。むしろ『シャローム』という言葉の積極的な意味は『人間の最高の幸せをつくりだすものすべて』。それを『シャローム』と言います。人間の理想的な状態、それを『シャローム』と言います。「欠けが無い満たしの状態」。単に争いや戦争がない、紛争がないといった消極的なものではありません。健康・長寿・繁栄・勝利・救い、それらすべてを『シャローム』と言います。繁栄も成功も何もかも、欠けたところがないものを『シャローム』というわけです。それをもたらすことができるのは、平和の君イエス・キリストだけであります。聖書では、『平和・平安』は、神との正しい関係がもたらすということをハッキリ教えています。詩篇 85 : 10 を見て欲しいと思います。

**10 : 恵みとまこととは、互いに出会い、義と平和とは、互いに口づけしています。**

『義』という言葉は、神との正しい関係。ですから、神との正しい関係が『神の平和』と切っても切り離せない不可分な関係であることが分かります。イザヤ 32 : 17~18 もお読みします。

**17 : 義は平和をつくり出し、義はとこしえの平穩と信頼をもたらす。**

**18 : わたしの民は、平和な住まい、安全な家、安らかないこの場に住む。**

このように聖書では、『平和・平安』は、神との正しい関係『義』がもたらすものだを教えてます。それに対して同じくイザヤ 48 : 22 では

**22 : 「悪者どもには平安がない」と主は仰せられる。**

とあります。あなたには平安がありますか。平安がなければ、あなたは悪者だと、悪い者です。旧約聖書に登場する偽りの預言者たちは、イスラエルの民が罪を犯して神に背いているのに、「シャローム、シャローム、平安だ、平和だ」と言って宣言しました。神はそれが間違いだとハッキリ宣告されました。神の民たるものは、神と正しい関係なくしては決して平和を得ることは出来ない。神に従うことなしに、平安が与えられないということを、預言者を通じて神は宣告されました。神と正しい関係がなければ、決して平和・平安がやって来ない、ということ覚えて欲しいと思います。「平安が無いです。いつも心が騒いでいます。落ち着きません。ざわめいています。不安で不安で仕方がありません。」カウンセラーのところへ、心療内科へ、神経内科へ、精神分析医のもとへ、向精神薬、抗鬱剤を求めて。それらは気休めでしかありません。平安が無ければ、神との正しい関係をまず求めなくてはいけません。『神の国と神の義』、これをまず求めなければいけません。そして、もうひとつ覚えて頂きたいのは、聖書に『平和・平安』というものが二種類あるということを知って頂きたいと思います。先ず一つ目は、神との平和。これは、『和解』とも言い換えることができます。ローマ 5 : 1 に出てきます。

**1 : ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。**

これが一種類目の『平和・平安』です。信仰義認によって与えられるもの。今までは私たちは、神と敵対して生きてきたわけです。でもイエス・キリストを信じるその信仰によって、神との間に敵意のもととなっていた『罪』が完全に除去されたので、処理されたので、私たちは神とスムーズな関係を持つことが出来るようになったわけです。それが神との『平和・和解』です。十字架によって敵意は取り去られたとパウロは言っています。

もう一つの二種類目の『平和・平安』というのが、ピリピ 4：6～7 に出てくる『神の平安』というものです。『神との平和』と『神の平安』は全然違います。ピリピ 4：6～7 をお読みしますのでお聞き下さい。

**6：何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。**

**7：そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。**

これが2種類目の『平安・平和』です。『神の平安』。それは祈りを通じて、神との交わりを通して与えられるものです。前者の1種類目の『神との平和』はキリストを信じる信仰によって、信仰義認によって与えられるもの。ですから、これはクリスチャンならば全員得るものです。イエス・キリストを信じた瞬間にあなたは神と和解します。『神との平和』を持っていないクリスチャンは存在しません。しかし、すべてのクリスチャンが『神の平安』を持っているとは限りません。なぜならば彼らは思い煩ってしまっているから。祈ることをせずに、思い煩って心配ばかりしている人には、『神の平安』はありません。この『神の平安』は祈りという神とのコミュニケーション、交わり的手段を通さなければ、決して体験出来ないものです。ですから、『神との平和』と『神の平安』、これは全く別個の体験です。そして、これには順序があります。1種類目の『神との平和』は、イエスを信じるその信仰を持った瞬間に与えられるものです。救われた時点で、信仰告白した時点で与えられるのが、1種類目の『神との平和』であります。しかし、クリスチャンであろうとも2種類目の『神の平安』を知らずにずっと生きてしまう人があるわけです。クリスチャンなのに、いつも思い煩っている、心配ばかりしている。クリスチャンなのに、いつも取り乱している、パニックっている。クリスチャンなのに、「病院に行かなきゃ、薬飲まなきゃいけない、心を落ち着かせるために。」それは、『神の平安』を今体験していない状態にあるということです。この『神の平安』は祈りを通して、神との交わりを通して与えられるものです。そして、これは何があっても揺るがない、失われないものです。たとえ世界が滅びてしまってもです。たとえあなたの世界が崩壊しても、あなたの健康がもう失われてしまう、余命幾ばくも無いという時もこの『神の平安』があなたを支えます。愛する者を失ってしまう時、地震や津波や火事などですべてを失ってしまう時、それでも神の平安があなたを満たします。『平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。』とあります。多くのクリスチャンは神との平和を得ているにも関わらず、困惑し、心配し、取り乱します。彼らには、「神が解決してくださる」という確信が無いのです。だから危機に瀕しているように、いつも感じてしまうわけです。イエス・キリストは、ヨハネ 14：27 でこのように約束しています。この世が与えることが出来ない平安をわたしは与えると。

**27：わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。**

ですから、真の『平和・平安』は、このイエス・キリスト、すなわち「平和の君」、**イザヤ 9:6** で言われている「平和の君」であるイエス・キリストをまず知ることから始まります。先ほども言いましたが、イエス・キリストこそ平和そのもの、平安そのものです。**エペソ 2:14** にハッキリとそう書いてあります。

**14: キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、**

クリスチャン生活は、平和をつくる生活。平和をつくる者、“peace maker”と英語で言います。神の子どもたちは、いつもそうします。**コロサイ 3:15** もお読みします。

**15: キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。**

キリストの平和、若しくは平安があなたの心を支配するように。『支配』という言葉は、丁度野球のアンパイアと同じ言葉です。アンパイアが、丁度セーフかアウトか言う時に、その基となるのがキリストの平和です。心に平和がある時、平安がある時、セーフです。心にキリストの平和が無い時、平安が無い時、それはアウトです。分かり易いですね。そうやってクリスチャンたちは、判断します。このためにどっちを選んだらいいだろうか、どうしたらいいだろうか、迷う時、苦悩する時、キリストの平和があればゴーサインです。なければ、それはまだ待たなくてはいけないか、若しくはあきらめなくてはならない、手放さなくてはならない、方向転換しなければならないことかもしれません。平和というものは自分で作り出すと言っても、作り出せるものではありません。**ガラテヤ 5:22** を見て下さい。そこにこう書いてあります。そこには御霊の実について、聖霊のフルーツについて、フルーツと言っても単数形です。一つの実です。

**22: しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、**

**23: 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。**

御霊の実は、聖霊が生み出すものです。私たちが作り出すものではないのです。愛も喜びも平安も私たちが自助努力によって生み出せるものではない。平和を作り出せる、これは聖霊の御業です。私たちの反戦運動で、政治活動で平和を作り出せるわけではないのです。人間の活動によっては、真の平和はもたらされません。これは神が生み出すものです。御霊によって歩むとき、平和の実を結ぶことができます。で、テキストの**マタイ 5:10**。これは、**10~12 節**までをひとまとめに読みたいと思います。

**10: 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。**

**11: わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。**

**12: 喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。**

『迫害』という言葉は、ギリシャ語では『ディオコー』”dioko”と言います。『ディオコー』というのは、「捕まえる為には手段を選ばずにしつこく追い回す」、ですから「しつこく間断なく攻撃して悩ませる、困らせる、苦しめる」、現代風の言葉で言えばハラスメントもこれに当たります。「迫害されることがどうして幸いなのか分かりません。しつこく間断なく、休むことなく、攻撃して悩ますこと。悩まされる、困ら

される、苦しめられること、ハラスメント受けること。どうしてそれが幸いなんですか。」これまでの流れをもう一度整理したいと思います。**3 節**から始まっています。正確には、霊において貧しい者、破産している者、その者は幸いです。もし自分が霊的に破産状態であることを認識し、**4 節**にある悲しむ者、つまり自分の犯した神に対する罪というものを嘆き悲しみ、**5 節**で柔和で、**6 節**で義に飢え渴き、そして**7 節**であわれみ深く、そして**8 節**で心のきよい、さらに**9 節**で平和をつくる人、であるならば、普通であればその人たちはだれからも愛され、敬われ、尊重され、称賛される人だと私たちは普通そのように考えます。そんな人ほど立派な人、もてはやされる人は存在しないじゃないですかと。でもイエスはそういう人は間違いなく迫害されると言っているわけです。霊的に破産状態である、神様無しでは生きていけないということを謙遜に認めている人。自分の犯した罪を心から嘆き悲しんでいる人。柔和で義に飢え渴いて、あわれみ深く、心がきよく、平和をつくる人。その人は迫害されると。講解説教の名手でマシュー・ヘンリーという人が、この箇所をこのようにコメントしています。「これはあらゆる逆説の中の最たるもの、キリスト教特有の逆説である。」**マタイ 5：10～12** はマシュー・ヘンリーに言わせれば、あらゆる逆説の中の最たるもの、キリスト教特有の逆説、パラドックスであると。聞いたことのない話です。迫害される者が幸い、幸せになる。ありえないことです。でも聖書にはこのような迫害の約束がクリスチャンたちになされています。**第二テモテ 3：12**。よく皆さんにはお伝えします。

## 12：確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

素晴らしい約束です。クリスチャンとして真面目に生きていきたい、熱心に信仰生活を、教会生活を送っていききたい、毎日聖書を読んで、祈って、欠かさず礼拝に集って、そしてキリストのように生きていく。そう願う者は全員迫害を受けます。それはイエスが言われた通りです。心の貧しい者、悲しむ者、柔和な者、義に飢え渴く者、あわれみ深い者、心のきよい者、平和をつくる者は、全員、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者ですが、彼らはもれなく迫害を受けると。あまり人気のない言葉です。皆さんは聖書に線を引いているかもしれません。いろんな印をつけているかもしれません。これはいい言葉だと思ったら、そこに印をつけるかもしれません。でもなかなか迫害を約束している箇所には線を引かないかもしれません。**マタイ 5：10～12** をしっかり蛍光ペン等で線を引いて、それを際立たせるようにしている人はいないかもしれません。**第二テモテ 3：12** の迫害の約束にマーカーを付けている人はいないかもしれません。でも他の箇所ならば、一生懸命に線を引いているかもしれません。祝福の約束があるところ、祈りの答えが与えられるところ、必要が満たされる場所、自分にとって非常に聞こえが良いところ、そういったところは、慰めとなる場所、励ましとなる箇所、そういう箇所はたくさん線が引いてあるかもしれません。でも、自分にとって不都合なもの、そういう教えについては、読み飛ばそうとしたり、特別印をつけようとしないう、不人気なところがあります。でもそういう線を引かない、印をつけない、そういう御言葉にこそ目を留めて、思いを潜めてみたらどうかと、最後に皆さんにチャレンジしたいと思います。

迫害される者は、イエスによれば祝福されると約束されています。そして、旧約聖書に登場する偉大な預言者たちの仲間入りを果たす。彼らが受ける報いと同じものを天において受けると約束されています。旧約聖書の偉大な預言者たちを思い出して下さい。古くはエノクという人、生きたまま天に上げられました。携挙の第1号です。ノア、彼も預言者でした。アブラハム、モーセ、サムエル、ダビデも王でありましたが預言者でもありました。預言者の中の預言者と言えばエリヤ。その後継者のエリシャ、ものすごい奇跡を行いました。またイザヤやエレミヤもそうです。ダニエルも立派な預言者です。そうした旧約聖書の預言者たち。また旧約聖書の最後の預言者とは、バプテスマのヨハネであるということも先日学んだばかりです。その彼らと同じ報いを、迫害される者は受けると言っているのです。人に認められ、ほめられ、

称賛され、この世で報われるのではなくて、天において神からの報いを、褒章を頂く、これは幸いなことだと。これは喜びおどるべきことだと言われていています。勿論私たちはこの世でも認められたい、ほめられたい、スポットライトを当てられたい、この世で報われたいと願いますが、でもこの世というものはいつか終わるものです。で、この世というものは実に薄情なところですよ。私たちの人気はすぐに翳<sup>かげ</sup>りを見せます。ブイブイ言わせていた頃は、地位や名誉があった頃は、お金があった頃は、人はあなたの周りに集まって来ます。そしてあなたをいつも持ち上げようとしてくれます。でも一度あなたが、お金を失い、財産を失い、地位や名誉を失い、仕事を失い、何もかも失ったらどうでしょうか。彼らはあなたから離れて行きます。もうあなたを認めなくなります。もうあなたを褒めなくなります。ですから、それらは儚<sup>はかな</sup>い虚<sup>むな</sup>しいものなのです。でも天における報いは、そのようなものとは違います。失うことのないものなのです。喜びおどるべきことです。このことは**第一ペテロ 4：12～13**にも書かれています。

- 12：愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、**
- 13：むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。**

喜びおどるということが出来ます。『義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。わたしのために（キリストのために）人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた』偉大な預言者たち。先ほど名前を列挙しました。彼らのことを思い出して下さい。すごいなあ皆さん思っていたと思います。大活躍した彼らのその英雄伝を私たちは旧約聖書の中に見ることが出来ます。でも、彼らと全く同じ報いをあなたも受けるのです。もしあなたがキリストの名のゆえに迫害されているならば、です。クリスチャンであるということだけで、あなたが馬鹿にされ、悪口雑言を浴びせられる時、あなたがたは旧約聖書の預言者たちと同じ報いを天において受けるのだと。だから喜びなさい。落ち込んでいる場合ではない。ムカついている場合ではない。それは喜びおどるべきことだということです。

最後に、これで終わりたいと思いますが、一つの注意事項を皆さんに与えておきたいと思います。釘を刺しておきたいと思いますが、ここで言われている『迫害』とは、あくまで「義のため」とか、「わたしのため」とか、「ありもしないことで」という但し書きがあります。「義のため」の迫害なのかどうか。「わたしのため」つまり「イエス・キリストのため」の迫害かどうか。また「ありもしないこと」での迫害であるかどうか。悪口を浴びせられている、それは「義のため」でしょうか。「キリストのため」でしょうか。「ありもしないことで」言われているのでしょうか。迫害される理由というものを是非考えてみて下さい。罵詈雑言言われる、ののしられる、そういう根拠です。もしかしたら「義のため」ではなくて、「自分のやらかしてしまったことのため」に。「義のため」ではなくて「不義のため」にあなたは迫害されているかもしれない。迫害という言葉は『ディオコー』という言葉で先ほど紹介しましたが、しつこく間断なく、攻撃を受ける、悩まされる、困らされる、苦しめられること、ハラスメント全般です。それは「義のため」でしょうか。それとも「自分の不義のため」でしょうか。それは「わたしのため」というイエスのためであるのか、それとも「自分のため、自分の故」なのでしょう。か。「ありもしないこと」ではなくて、実は「あることで」なのかもしれない。迫害されて然るべき、そういう根拠・理由がひよっとしたらあるかもしれない。それは、あなたの犯した罪とか、あなたの問題発言、問題行動、あなたの振舞い。それは信仰の故にではなくて、あなた自身の個人的な理由の故に。クリスチャンだからじゃなくて、あなただから。それ

でもしあなたが悪口を浴びせられているならば、それは幸いだと思って欲しくありません。それは、蒔いた種です。言われても仕方がないということもあるわけです。勘違いして、「どうして私の姑は、こんなに私にきついのか。クリスチャンだから、こんなにひどいことを言われる、やられる。」確かにそうかもしれません。でもそうじゃないことも多々あるかもしれません。「どうして私の上司は、こんなに私に厳しいのか。私をののしり、同僚の前で馬鹿にして、ひどい。」でもそれは「義のため」なのでしょうか。それとも「不義のため」でしょうか。「キリストのため」でしょうか、それとも「あなた自身のため」で、あなたの故に。「ありもしないこと」じゃなくて、実は「大有り」ということで言われているかもしれません。その辺も是非考えて頂きたいと思います。第一ペテロ 4 : 14~16 にこう書かれています。

**14 : もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。**

その一方で、

**15 : あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行う者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。**

「キリストの名のために」非難を受けるのか、それとも自分の罪のゆえに、みだりに他人に干渉するようなことをして、自らに苦しみをもたらしてしまう。そういうこともあるわけです。また面白いもので言うならば、箴言 27 : 14 にはこう書いてあります。

**14 : 朝早くから、大声で友人を祝福すると、かえってのろいとみなされる。**

朝早くから「ハレルヤ」とか言って、「うるさい」と言われて、私はクリスチャンだから迫害されたと思ったら大間違いです。睡眠を妨害されれば、だれでも勿論うるさいということになりますけれども。これは注意しなければいけないところです。私たちはしっかりと「義のため」に、「キリストのため」に、自分自身の言動をしっかりと見直して、正して、そして自分に落ち度がない場合、その時には必ず迫害があるということも覚悟して、そして迫害に遭ったならば、大喜びして下さい。飛び跳ねて下さい。あなたの報いは天において確保されました。ですからキリストの名を貶めるようにして、クリスチャンでありながらもクリスチャンらしくない振舞いをして、その結果ノンクリスチャンから馬鹿にされたり、ののしられたり、悪口を言われたら、これは逆にキリストの栄光を傷つけることになります。クリスチャンだから迫害されて然るべきですけれども、クリスチャンなのにキリスト以外のことで、信仰以外のことで馬鹿にされたら、これはかえってキリストの栄光を貶めることですから、それも大きな過ちとなりますから、是非その際には悔い改めて、また良い意味で迫害されるように努めて頂きたいと思います。逆に「クリスチャンとして迫害されたことはありません」という人があるならば、是非悔い改めて下さい。そうでなければ、天におけるあなたの報いは無いものだと思って下さい。世渡り上手にして、嫌われたくないから、悪口を言われたくないから、変な人に思われたくないから。そのようにしてうまくかわしてきた、迫害を免れてきた、それがこれまでのあなたであったならば、残念ですけれどもあなたは「幸いな者」ではありません。その逆であります。必ず天においてあなたは、今まで経験したこともないような後悔をすることになります。「こんなことだったらもっと迫害されておけば良かった。」と必ず思います。それは今あなたが信じられなくても、その日になったら分かります。「あの時、あの晩、牧師が言っていたことは本当だった。」と。「もっと迫害されておけば良かった。」と言う日が必ずやって来ますから、そういう後悔をする前に、是非今からでも遅くはありません。義のために、キリストのために、ありもしないことで悪口を言われる者、迫

害される者は幸いです。あなたがたの報いは、あなたが想像する以上に大きいからです。天に行ったら、ビビると思います。「すごいな。あんなことで、こんな報いが頂けるのか」と。「あの人にあんなふうにひどく言われたけれど、その結果がこれだったのか。」と、感動します。いい意味でショックを受けます。ですから是非期待をして頂きたいと思います。迫害されて喜べる。それがクリスチャンです。ありもしないことで悪口を言われる。それで喜べる、喜びおどる。それがクリスチャンです。この世とは逆行する生き方、逆説的な生き方をする、それがクリスチャンであります。それがイエス・キリストが説かれた教え、山上の説教の『八福の教え』の部分です。この教えを実践する者は、もう既に天国を先取りしている者です。天国志向の者であります。その人たちは、もうこの世には縛られません。この世で、もう未練もない者、憂いもない者、失うものがない者。そして、この世でどんなネガティブな、否定的な体験をしようとも、もうその者は揺るぎません。イエス・キリストのように歩むことができます。自分を捨てて自分の十字架を負って生きることが出来ます。キリストに従うという生き方。それが『山上の垂訓』に従う生き方であります。今回は、その続き。まだ山上の垂訓は 7 章まで続きますので、是非楽しみにして頂きたいと思います。豚に真珠、砂上の楼閣、狭き門、そういった言葉も出てきます。またイエス・キリストの黄金律、ゴールデンルールというものも出てきます。地の塩、いろんな日本人にも馴染みとなった聖書からとられた言葉がオンパレードで出てきますので、その意味を正しく知って頂きたいと思いますし、それがまさにクリスチャンの姿を表します。是非、来週も楽しみに集って頂きたいと思います。